

「論文概要書」

平安中期の文学における催馬楽・風俗歌の受容

——『うつほ物語』『源氏物語』を中心に——

山崎 薫

序章

本論文は、平安期の宮廷歌謡である催馬楽・風俗歌が、平安中期の文学に、どのように取り込まれ、利用されているのかを明らかにすることを目的とする。

催馬楽・風俗歌は、『源氏物語』に非常に多くの楽曲がみられることが指摘されており、その引用表現についてたびたび論じられてきている。一方で、『源氏物語』以外の文学における催馬楽・風俗歌の引用については、あまり目が向けられておらず、また、歌謡の動態性が十分に捉えられていないまま議論が進められているという問題点がある。歌謡は、発生から発展、そして衰退に至るまでに大きな変容を伴う。催馬楽・風俗歌が俗謡として発した時期と、平安期の宮廷において流行した時期においては、かなりの時間的隔たりがあり、受容層も大きく異なる。演奏の形態や詞章の解釈などには、時代とともに大きな変化があったことが想定されるため、平安中期の作り物語における催馬楽・風俗歌を論じる上では、物語が成立した当時の歌謡の有り様を捉える必要がある。こうした問題意識のもと、本論文では、歌謡の歴史的・状況的な動態を重視し、同時代の和歌表現ともかかわらせながら、『うつほ物語』『源氏物語』における催馬楽・風俗歌の引用表現を中心に考察する。

第一部 『うつほ物語』と催馬楽・風俗歌

第一章 『うつほ物語』における唐楽・高麗楽・催馬楽の演奏描写

——平安中期の演奏記録との比較を通して——

第一章では、『うつほ物語』における音楽としての催馬楽の用いられ方を捉えるために、催馬楽のみならず、唐楽・高麗楽の演奏場面の描写に光を当て、漢文日記などにみられる平安中期の演奏記録や、『源氏物語』をはじめとする他の文学作品の用例と照らし合わせな

がら考察を進めた。『うつほ物語』における唐楽・高麗楽・催馬楽の用例をみると、平安中期に特によく演奏されていたと考えられる曲が多く用いられていることが分かる。また、平安中期の管絃の遊びにおいては、調子や唐楽・催馬楽の曲の旋法を「呂」「律」の二分類で捉え、「呂」から「律」、あるいは「律」から「呂」に移り変わるように演奏することで、旋法の対照性が楽しまれていたことが想定されるが、『うつほ物語』においても、「呂」と「律」の曲が交互に配される演奏場面が確認できるほか、唐楽曲の「万歳楽」演奏場面に關しては、音楽の旋律を歌う唱歌についても描かれるなど、舞だけではなくその音楽の面白さに焦点が当てられていることが指摘できる。一方で、「菊の宴」巻では、唐楽の「陵王」に先んじて、高麗楽の「落蹲」が舞われるという、平安中期における演奏状況とは大きく異なる描写も存在する。これは、「俊蔭」巻の場面において、かつての嵯峨の院の御賀で正頼が「落蹲」を見事に舞ったと語られることとかかわって、物語の前半部では「陵王」よりも「落蹲」が重視されたためだと考えられる。『うつほ物語』は作り物語であり、このように、平安中期の音楽がそのまま映し出されているとは言い難い面もあるが、『うつほ物語』の音楽描写に成立当時の現実の音楽の影響があることは確かである。物語の音楽を、音楽史的位置づけの中で捉えることで、物語が音楽を描写するのにどのような工夫をしているのかという点を明らかにすることができると思われる。

## 第二章 「祭の使」巻と「菊の宴」巻の催馬楽引用 —— 「声振り」に注目して ——

第二章では、「祭の使」巻、「菊の宴」巻にみられる催馬楽の楽曲の「声振り」を用いて和歌を「歌う」という、他の文学作品には見られない催馬楽の引用について考察した。「声振り」は同時代には確認できない語であるが、『残夜抄』などの中世の楽書に用例が見られる。これらの用例を踏まえると、『うつほ物語』において、「声振り」を用いる作中人物たちは、いわば「替え歌」のように、催馬楽の楽曲に合わせて自作和歌を歌っているものと解釈できる。「祭の使」巻、「菊の宴」巻において、催馬楽の詞章は、「声振り」を通し、和歌の内容と併せてほめかされるという形で利用されていると考えられる。この方法は、物語の状況と詞章の内容が示唆的に重ね合わされ、用いた人物の意図しない内容までも聞

き手に伝わるという展開を可能にしている。『うつほ物語』にみられる「声振り」を用いたやりとりは、作り物語における、巧みな催馬楽引用の手法の先駆として認めることが出来る。

### 第三章 平安中期における風俗歌「大鳥」

#### ——「内侍のかみ」巻の唱和歌の解釈をめぐって——

第三章では、平安中期における風俗歌「大鳥」の詞章の解釈について考察した上で、その詞章が踏まえられている「内侍のかみ」巻の唱和歌について検討した。「大鳥」は、「大鳥の羽に霜が降ったと言ったのは誰か」という問いに対し、それを言った者として、様々な鳥の名前が挙げられて疑われるという内容の間答形式の詞章を持つが、現存する複数の詞章において、問いに対する最終的な答えの部分それぞれ異なっている。このことから、風俗歌「大鳥」は、「大鳥の羽に霜が降った」という問いの前提すら不確かな歌謡として捉えられていたのではないかと考えられる。また、和歌表現などとの関わりから、風俗歌「大鳥」の詞章は、『大鳥が霜夜に恋い侘びている』と言ったのは誰か」という、色恋に引きつけた内容で解釈されていた可能性が指摘できる。「内侍のかみ」巻における兵部卿の宮の歌は、評判になっている承香殿の女御との仲を否定するために、当該歌謡の不確かさを利用したものと解釈しうる。それに対して、弾正の宮の歌は、兵部卿の宮が評判通りの「あだ人」だと決定づける内容として捉えられる。「内侍のかみ」巻における「大鳥」は、色恋に引きつけて解釈された上で、兵部卿の宮、兼雅、仲忠ら「あだ人」の道ならぬ恋を示唆する文脈で活かされていると結論付けた。

### 第四章 「蔵開」巻における風俗歌「名取川」

#### ——仲忠と「これこそ」のやりとりをめぐって——

第四章では、「蔵開」巻における風俗歌「名取川」の用いられ方について論じた。風俗歌「名取川」の詞章は、「名取川の瀬を幾つ渡ったのか」という問いと、「真夜中に渡ったので、よく見えず」知らないよ」という応答で構成されている。歌枕としての「名取川」のイメージから、この詞章は、色恋にかかわるものとして捉えられていた可能性が高く、恋

人のもとへ忍んで通う様子や、それが露見し、噂になってしまった様子を想起させる。「蔵開上」巻においては、現存する詞章とは完全には一致しないものの、童たちによって、風俗歌「名取川」に類する歌謡が歌われていると考えられる場面がある。ここでは、詞章中の名取川を渡る人物として、仲忠が重ねられているとみられ、その好色性が囃し立てられている。それに対して、仲忠は、「知らずうや」という詞章を用い、はぐらかすように応答する。さらに、「蔵開中」巻、「蔵開下」巻では、この仲忠の応答に対し、「これこそ」という女童が、やはり「名取川」の「夜し来しかば」という詞章を踏まえた機知に富む切り返しを行い、仲忠の関心を引いたことに関する話題が語られていると解釈される。これらの一連の場面において注目されるのは、仲忠の好色性や、仲忠とさま宮の接近が描かれることである。「蔵開上」巻の風俗歌「名取川」の歌唱は、「名取川」が、忍び通いの噂が立つことを想起させる詞章を持つことを考え併せれば、仲忠とさま宮の道ならぬ恋をほのめかすものとして捉えられる。このような描写は、本筋においては語られることのない人物の一面や、物語の展開の可能性を示唆していると考えられる。

以上、第一部では、従来、あまり注目されて来なかった、『うつほ物語』における催馬楽・風俗歌にかかわる表現について分析し、解釈を試みた。その結果、『うつほ物語』が、先駆的な手法で、催馬楽・風俗歌を巧みに取り込んでいることが明らかになった。第二章で考察したように、「祭の使」巻、「菊の宴」巻では、「声振り」を通して、「音楽の旋律」、「詞章の内容」、「和歌の内容」という三つの要素が重ね合わせられるという、非常に凝った催馬楽の演奏の描写がなされている。また、第三章、第四章で論じたように、「内侍のかみ」巻や「蔵開」巻においては、風俗歌が登場人物たちのやりとりや場面の展開に活かされている。第三章で取りあげた風俗歌「大鳥」も、第四章で取りあげた風俗歌「名取川」も、恋の噂について問答する詞章を持ち、さらに、問いかけに対する結論の部分が曖昧であるという共通点がある。『うつほ物語』は、これらの詞章を利用することで、兵部卿の宮と承香殿の女御、兼雅と仁寿殿の女御、仲忠とあて宮、仲忠とさま宮といった登場人物たちの

道ならぬ関係を、あくまで「そのような噂が立っている」という形で臙化しながら示唆していると思えらる。

## 第二部 『源氏物語』と催馬楽・風俗歌

### 第一章 『源氏物語』における唐楽・催馬楽の演奏場面

#### ——「呂」「律」の分類とのかかわり——

第一章では、平安中期において確立されていったとみられる、調子や曲の旋法を「呂」「律」に二分類して捉えるという概念が、『源氏物語』にどのように反映されているのかを論じた。『源氏物語』における唐楽と催馬楽の全演奏例を検討した結果、唐楽・催馬楽ともに、春の場面には「呂」、秋の場面には「律」に分類される調子・曲が用いられる傾向にあり、陰陽五行思想の影響のもと、「春」「秋」と「呂」「律」を結びつける見方が踏まえられていると考えられる。平安中期における演奏記録との比較から、『源氏物語』の音楽の演奏場面では、演奏曲目が網羅的に列举されているわけではなく、調子名や曲名のいくつかは抜粋されて描写されていることが読み取れるが、その選択の基準の一つとして、旋法という音楽的な側面が重視されていると言える。また、『源氏物語』においては、音楽の描写にも「呂」「律」の区別が表れている。「呂」の音は「はなやか」と形容され、主に行事などの「晴れ」の場を彩る。一方、「律」の音は「なつかし」と形容され、御遊終盤のくだけた雰囲気象徴することが多く、私的な演奏の場においては、しばしば演奏者の憂愁と重なるように用いられている。調子や曲を「呂」「律」の二分類で捉え、その対照性に面白さが見出されたとみられる平安中期の音楽の状況が、曲の旋法をも場面と調和するよう意識した音楽描写に反映されていると考える。

### 第二章 平安中期における催馬楽「山城」——「瓜たつ」の解釈をめぐって——

第二章では、催馬楽「山城」の詞章の解釈について、平安期の和歌を手掛かりにしながら考察した。催馬楽「山城」の詞章の解釈については、従来、多くの議論がなされてきており、特に、「瓜たつま 瓜たつまでに」の「たつ」をめぐっては、決定的な用例が示され

ないまま様々な説が提唱されている。そこで、平安期の「瓜」と「たつ」を詠んだ和歌について検討したところ、「瓜たつ」は、当時、「(瓜の蔓を断って)収穫する」の意で捉えられていた可能性が高いことが判明した。それゆえ、平安期において、「山城」の「瓜たつま瓜たつまでに」は、「(瓜作りが)瓜を収穫する間 収穫するまでに」と理解されていたと考える。また、和歌において「瓜」はしばしば女性に喩えられており、「瓜の収穫」には、好色な男性が女性を手に入れることが重ねられていたとみられる。平安中期において、催馬楽「山城」の詞章は、瓜に見立てられた女性が、「瓜作り」に対して、収穫の時までに実(身)を任せてしまおうかどうか悩むという内容として理解されているとみられ、和歌に巧みに利用されている。

### 第三章 「紅葉賀」巻の催馬楽引用 —— 源典侍の物語における「こま」の繋がり ——

第三章では、第二章を踏まえながら、「紅葉賀」巻における催馬楽の引用について論じた。「紅葉賀」巻の源典侍をめぐる物語においては、「山城」、「東屋」、「石川」という三曲の催馬楽がほぼ連続して引用される。この三曲の詞章には、「駒」の掛詞や縁語が含まれるという繋がりが見られる。源典侍の「山城」の歌唱場面では、「狛のわたりの瓜作り」に好色な頭中将が重ねられ、頭中将になびいてしまおうかどうか悩む、源典侍の心情が表されていると考えられる。続いて用いられる「東屋」の詞章の「まや」は、大半の注釈で「真屋」とされるが、平安中期においては「馬屋」の意で解釈されていた可能性が高く、当該場面で、光源氏は「馬屋」にいる源典侍を訪れる「駒」に喩えられていると捉えうる。また、後の場面の光源氏と頭中将の「石川」を踏まえた和歌においては、詞章の「高麗人」には、頭中将の帯を手に入れた光源氏が寓されている。いずれの場合も、「こま」には源典侍に慕い寄る男性が象徴されており、「紅葉賀」巻において源典侍が初めて登場する場面の、『古今集』八二九番歌や神楽歌を踏まえたやりとりとの繋がりを持たせられていると考えられる。「紅葉賀」巻において、催馬楽「山城」、「東屋」、「石川」の三曲の異なる詞章の世界は、和歌表現における「こま」の掛詞や縁語が意識されながら、源典侍と彼女に慕い寄る「こま」の物語として一つに結び付けられて用いられていると言える。「聖」と「俗」の両義的

なイメージを帯びた、詞章の「こま」に重ねられることで、光源氏は、その「俗」な一面を頭わにされていくと考えられる。

#### 第四章 「藤裏葉」巻における催馬楽「葦垣」——「年経にけるこの家の」考——

第四章では、「藤裏葉」巻における催馬楽「葦垣」の引用について考察した。「葦垣」の詞章は、男が垣根を越えて女を盗もうとしたところ、女の親に知られて失敗し、「誰か 誰か このことを 親にまう讒し申しし」と、讒言した人物が探され、「この家の おと嫁 親にまう讒しけらしも」と応答があり、嫌疑を掛けられた「おと嫁」が「我はまう讒し申さず」と自身の潔白を弁明するというもので、二者の問答の形式になっている。「藤裏葉」巻の藤花の宴においては、弁の少将によって「葦垣」が歌唱されるが、ここで内大臣が歌い添える「年経にけるこの家の」は、現在確認できる「葦垣」の「とどろけるこの家」という詞章と一致せず、内大臣が歌い替えを行っていると考えられる。「葦垣」の詞章の内容を踏まえれば、弁の少将の「葦垣」の歌唱は、かつて内大臣に露見し、失敗した夕霧の幼恋を揶揄したものと捉えられ、内大臣の歌い替えは、それを取りなすものと考えられよう。そこで、「年経る」ということばの用例について検討した結果、内大臣の歌い替えた「年経にける」ということばが、従来解釈されているように「家」を修飾するのではなく、「おと嫁」という、本文には引用されていない「この家の」に続く詞章にかかる可能性が高いと結論付けた。「少女」巻において、夕霧と雲居雁の関係が内大臣に知られてしまったのは、大宮に仕える「ねび人」の「後言」を漏れ聞いたからであり、この「年経にける」、老女房が、親に讒言したと疑われる「おと嫁」と重ねられていると考えられる。内大臣は、「若いどころか）たいそう年老いた、この家の（女房が「親」の私に讒言したのだ）」と「葦垣」の詞章の、讒言した人物を聞かれて応答する部分を歌い替えることによって、夕霧の幼恋の失敗の責任を自家の老女房に負わせ、笑いに紛らわそうとしていると解釈できる。

#### 第五章 『源氏物語』における風俗歌——「若紫」巻の光源氏の歌唱を中心に——

第五章では、『源氏物語』における風俗歌の引用について考察し、特に「若紫」巻で、光源氏が「常陸には田をこそ作れ」と風俗歌「常陸」を歌唱する場面について解釈を試みた。

『源氏物語』に引用されている風俗歌の多くは、地方とつながりのある女君と光源氏のかわりの中で用いられていると言え、風俗歌が持つ地方性が強く意識されていると言える。一方で、風俗歌がかかわる女君の大半は、催馬楽の引用にもかかわっていることが指摘できる。『源氏物語』において、催馬楽と風俗歌が同じ女君にかかわって用いられるときは、両歌謡の詞章の類似性が意識され、それぞれの詞章が共通して持つ地方性や官能性が際立つよう、相乗的に用いられていると考えられる。そのように捉えた際、光源氏が風俗歌「常陸」を歌唱する「若紫」巻の場面と、催馬楽「貫河」を歌唱する「花宴」の巻の場面の問題が浮かび上がる。場面の状況から、いずれの歌唱にも光源氏の葵の上に対する思いが込められていると考えられるが、葵の上は地方性とは無縁の女君である。特に、「若紫」巻において、なぜ敢えて常陸国の風俗歌が用いられ、「常陸には田をこそ作れ」という詞章が本文に引かれるのか、従来の説では検討が不十分であった。そこで風俗歌「常陸」の詞章の内容について検討すると、国境を越えてまで来訪した男と、それを迎える女の官能的な恋の歌として解釈しうる。光源氏は葵の上を求めてはるばる会いに来たのだという恋情を、「常陸」の詞章の男の様子と重ねて歌っており、また詞章の女とは違って冷淡な葵上への不満を訴えていると考えられよう。そして、「常陸には田をこそ作れ」の「常陸」には、常陸国ではなく、光源氏が前夜から未明にかけて訪れていた都の「東の果て」である六条京極の「辺境」の地が重ねられ、その近辺に住む紫の上や「忍びたる所」の女と光源氏の関係を示唆しているものと捉えられる。

以上、第二部では、『源氏物語』における催馬楽・風俗歌にかかわる表現について分析し、解釈を試みた。『源氏物語』における催馬楽・風俗歌の引用は、一部で論じた『うつほ物語』にみられる表現を、さらに発展させ、深化させたものとして捉えられる。催馬楽の曲の「呂」「律」の旋法への意識は、『うつほ物語』においても読み取ることができたが、第一章で考察したように、『源氏物語』においては、物語を通して、ほぼ徹底的に曲の旋法と場面の季節との調和が図られており、催馬楽の音楽的側面がより描き出されていると考えられる。

また、『うつほ物語』のように「声振り」を通した引用はみられないものの、第四章では、登場人物が、もとの詞章の内容を想起させながら、問答体の詞章を活かして得意即妙に歌い替えるという場面があることを論じた。

『うつほ物語』においても、『源氏物語』においても、催馬楽・風俗歌は、卑俗な詞章を持つ「俗謡」としての一面と、管絃の遊びを彩る「宮廷歌謡」としての一面、その両面がそれぞれ物語の描写に活かされていると考えられるが、第三章で論じたように、「紅葉賀」巻の源典侍をめぐる物語では、そうした歌謡の持つ両面性が意識的に利用されていると考えられる。

## 終章

本論文では、『うつほ物語』『源氏物語』にみられる催馬楽・風俗歌の引用表現の分析を中心に、平安中期の文学における催馬楽・風俗歌の受容について考察した。今後の展望としては、神楽歌・東遊歌にかかわる表現も併せて検討し、さらに、『源氏物語』以降の文学も視野に入れながら、平安期を代表する神楽歌・催馬楽・東遊歌・風俗歌という宮廷歌謡が、それぞれ、どのように文学に取り込まれているのかを明らかにしたいと考える。

近年、これらの宮廷歌謡については、音楽学や文献史学の見地から捉えなおされており、従来は不透明だった成立の過程や演奏の実態などが徐々に明らかにされつつある。本論文でも論じたように、文学における歌謡の描かれ方には、その時代の演奏状況や音楽観が反映されていると考えられ、その描写を音楽史的な位置づけの中で論じることが、表現の解明にも繋がる。今後も、こうした音楽学や文献史学における歌謡研究との連携を図りながら、より研究を深め、歌謡がいかに宮廷における文学に影響を与えたのかという点を解き明かしていきたい。